



名曲名盤再発見 一歴史的名盤を振り返る



プログラム

今日は通常のライブ音源使用のコンサートはお休みし、正規録音の名盤を再認識しようというプログラムです。1964年以降、コンサート・ピアニストと決別、亡くなるまでスタジオ録音に専念した天才**クルド**といえバツハ、中でも「**ゴルトベルク変奏曲**」は新鮮で鮮烈な名盤です。**ピリス**、**デュメイ**、**ワン**によるこの**フラームスのトリオ**を初めて聴いた時の感動は今でもはっきり覚えています。たとえようも無い美しさとみずみずしさ、これほど豊かな情感を持った演奏も他になく、今日でも室内楽演奏の最高傑作と言える名盤です。名ソプラノ、**シュワルツコップ**の代表的名盤のひとつが、「**四つの最後の歌**」で、しみじみと歌いながら美を超越したような凄みがここにはあります。**グルダ**と**シュタイン**による**ベートーヴェンのピアノ協奏曲全集**は今日でも決して色褪せる事のない名盤ですが、特にこの**第4番**は、自然に流れながら、しなやかできらきらしたピアノが素晴らしく、表現の豊かさも格別の名演です。多発性硬化症という難病に冒され、わずか28才で引退、42才で亡くなった**ジャクリーヌ・デュ・プレ**の残した演奏の数々は決して多くはありませんが、そのどれもが名演といっても良く、**エルガー**が特に有名ですが、この**ドヴォルザーク**での渾身の情熱を注ぎ込んだ雄弁でスケールの大きな演奏も、永遠に輝き続ける名盤です。名オペラ指揮者としての**カラヤン**と小品演奏で抜群のうまさを見せる**カラヤン**とが最高の形となって生まれた名盤が「**オペラ間奏曲集**」です。**フランスの巨匠ミュンシュ**は、黄金時代を築き上げたポストン響を辞任した後フランスに戻り、新生パリ管弦楽団の初代音楽監督に就任、故郷で最後の花を咲かせました。豪快で剛直、燃焼度の高い**ミュンシュ**ならではの**フラームスの交響曲第1番**はこのコンビの代表的名盤のひとつです。ごゆっくりお楽しみください。

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750):

ゴルトベルク変奏曲BWV.988 から

グレン・グールド(ピアノ) (1955年録音 CBS/ニー盤)

ヨハネス・フラームス (1833~1897):

ピアノ三重奏曲第1番 長調 op.8 ~ 第1楽章

マリア・ジヨアン・ピリス(ピアノ)/オーギュスタン・デュメイ(ヴァイオリン)/ジャン・ワン(チェロ)
(1994年録音 グラモフォン盤)

リヒャルト・シュトラウス (1864~1949):

歌曲集 “四つの最後の歌” ~ 夕映えのなかで

エリーザベト・シュワルツコップ(ソプラノ)
ジョージ・セル指揮ベルリン放送交響楽団 (1966年録音 EMI盤)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ピアノ協奏曲第4番 長調 op.58 ~ 第1楽章

フリードリッヒ・グルダ(ピアノ)
ホルスト・シュタイン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団(1971年録音 ロンドン盤)

*** 休憩 ***

アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904):

チェロ協奏曲 短調 op.104 ~ 第1楽章、第2楽章から、第3楽章から

ジャクリーヌ・デュ・プレ(チェロ)
ダニエル・バレンボイム指揮シカゴ交響楽団 (1970年録音 EMI盤)

ピエトロ・マスカーニ (1863~1945):

歌劇 “カヴァレリア・ルスティカーナ” 間奏曲

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団(1967年録音 グラモフォン盤)

ヨハネス・フラームス (1833~1897):

交響曲第1番 短調 op.68 ~ 第1楽章冒頭、第4楽章

シャルル・ミュンシュ指揮パリ管弦楽団 (1967年録音 EMI盤)